

博士論文要旨

論文題名：読み困難者に対するマルチメディア DAISY 図書の 有効性に関する研究

-初等教育から高等教育までの継続支援を目指して-

立命館大学大学院社会学研究科
応用社会学専攻博士課程後期課程

クスノキ ケイタ
楠 敬太

本研究は、読み困難者を支援するツールとして開発されたマルチメディア DAISY 技術を活用したインクルーシブ教育を実現することで、読み困難者が順調に教育キャリアを獲得し、社会的に自己実現できる環境を整えるための基礎研究である。マルチメディア DAISY 教科書の有効性を科学的調査の実施とデータ解析により検証するとともに、初等教育から高等教育まで学校教育機関を縦断したツールの活用実証研究により、有効性を阻害する社会的要因を含む様々な要因を明らかにすることを目指した。さらに、阻害要因の乗り越え、マルチメディア DAISY 技術を活用したインクルーシブ教育の実現に向けて、理想的な活用方法や学習環境や社会的環境、学校教育の在り方に関して包括的な検討を行った。

本研究は、4つの章から成り立つ。第I章では、日本障害者リハビリテーション協会と連携し、マルチメディア DAISY 教科書に関するアンケートデータの数量解析を行い、有効性を検証するとともに、マルチメディア DAISY 教科書が直面する検討課題を析出した。第II章では、小学校、中学校それぞれ1校をフィールドとして、対象児童生徒7名に対する1年から2年以上にわたるマルチメディア DAISY 教科書の実証研究を行った。これらのデータに加えて、通級指導教室担当者（小学校8名、中学校4名）に対してインタビュー調査を実施し、これらの調査データを踏まえて、マルチメディア DAISY 教科書の活用を阻害する諸要因、有効な活用方法について考察した。第III章ではマルチメディア DAISY 教科書の利用経験があり、高等教育機関まで到達した読み困難者（4名）とその保護者からライフストーリーを聞き取り、読み困難という障害を乗り越えて「高等教育機関に到達しえた要因」を分析した。第IV章では、高等教育機関でのマルチメディア DAISY 図書の活用方法を検証するために、高等教育機関で読み困難さが顕著となった大学生（1名）に対してマルチメディア DAISY 図書を活用し、その有効性を検証した。またアメリカの大学に対してWEBインタビュー調査を実施し、国際比較社会研究の知見を踏まえて、高等教育機関における読みに困難がある学生への支援に関する課題を整理した。

第I章では、特に、マルチメディア DAISY 教科書の学年ごとの利用率カーブにおける構造的な問題を発見できた点は大きな成果といえる。従来、小学校1、2年生や中学校におけるマルチメディア DAISY 教科書の使用率の低さは問題視されてきたが、実は、小学校5、6年生から、使用率の低下が始まっており、それが、当初から現在まで一貫して構造的な問題であったことを認識できた点は、本研究の基盤的な問題意識となった。山形構造の主因は、特別支援教育の現状の在り方にある。とりわけマルチメディア DAISY 教科書の利用が通級指導教室等での個別指導の枠組みの場面に限られている点が、小学校5、6年生での活用低下を招いている。また、児童が周りの児童と違う教科書を使用することに抵抗感を感じることも、その理由の1つと推測される。自分自身の困難さ（障害）に対する適切な受容と理解の欠如が、自尊感情の低下を招き、ICTツールの利用を阻害する原因の1つとなっているのである。

第II章の実践研究では、マルチメディア DAISY 教科書には、読みのスピード・正確性等において、一定、治療的効果があることが明らかとなった。もちろん、治療的な有効性は、①低学年から活用、②毎日

の活用、③ビジョントレーニング・コグトレ等との併用、④保護者との連携、⑤通常の学級との連携等の使用条件が影響し、読み困難の背景要因や濃淡さ（困難レベル）に依存するが、本研究において、科学的データに基づき、その可能性を実証できたことは、大きな意味がある。今後、読み困難レベルや支援の在り方とクロスしたより詳しいケース検証を増やしていくことが求められる。また、マルチメディア DAISY 教科書の有効活用には、活用開始時期が重要であり、文字学習を始める小学校 1 年生から活用することが理想的である。そのためには、読み能力のスクリーニング検査を実施が重要となってくるが、こうしたスクリーニングとその後の支援方法について、その手法が確立されているわけではない現状も明らかとなった。本研究では、その手法の 1 つとして、RTI モデルに注目し、その可能性を高く評価した。

第 III 章の分析からは、高等教育機関に到達できた調査対象者は、幼少期から支援ネットワークに繋がることができており、マルチメディア DAISY 教科書の活用等を含む適切な支援や配慮を得られたことが、読み困難者自身の自己理解とセルフアドボカシー能力獲得に繋がったことが明らかとなった。これは保護者側の障害認知・受容を前提としている。全ての保護者の障害受容・理解を促進するには、特別支援教育におけるインクルーシブ教育の導入がキーポイントとなる。

マルチメディア DAISY 教科書を通常の学級や家庭教育でも活用できるようにするためには、通常の学級の教員や周囲の児童生徒の理解も必須となるが、この点からも、インクルーシブ教育の推進が不可欠と言える。インクルーシブ教育を日本社会において望ましい形で実現させるためには、ユニバーサルデザインのデジタル図書規格であるマルチメディア DAISY 教科書がその要石的な存在になる。

インクルーシブ教育を推進するためには、特別支援教育担当教員と学校内の他の教員、保護者、様々な支援機関等との連携を推進することが重要となる。その 1 つの方法として、「チームとしての学校」という政策が文部科学省によって提唱されているが、この政策にマルチメディア DAISY 教科書活用を適切に組み込むべきである。そのためには、特別支援教育コーディネーターの役割がいっそう重要となる。特別支援教育コーディネーターが、読みに困難のある児童生徒や保護者を中心として支援機関等様々な諸資源のネットワークを形成するキーパーソンとして役割を果たすべきであり、学校の教育環境を変化させることにより、読み困難児童生徒に対して、在籍する通常の学級でもマルチメディア DAISY 教科書を活用し、インクルーシブ教育を充実するという道筋が考えられるだろう。

マルチメディア DAISY 教科書による読み支援を越えて、テスト等の成績評価時や入試における合理的配慮での活用も重要になる。

インクルーシブ教育を推進するためには、「読み困難グレーゾーン」の児童生徒についても考慮すべきである。実際の教育現場では、発達障害の特性が見られるが、診断基準には満たない、いわゆるグレーゾーンの児童生徒も多く在籍するからである。マルチメディア DAISY 教科書は診断の有無に関わらず申請ができるため、読み困難グレーゾーンの児童生徒に対しても活用することができる現状は、この観点から非常に優れた配慮であると言えるだろう。

インクルーシブ教育の根底には、様々な人々が分け隔てのなく生活できる共生社会の実現が不可欠であり、共生社会を目指すためには、そもそも、あらゆる出版物のアクセシビリティ問題を解決することが前提となる。全ての書籍出版に際して、マルチメディア DAISY のような多様な機能が付随しているフルアクセシブルなデジタル図書化が求められる。そのために、大学や大学図書館の果たすべき役割が大きい。

本研究では、マルチメディア DAISY 教科書という図書製作技術に注目し、初等教育から高等教育まで学校教育機関を縦断した実証研究を通して、そうした技術に基づく教科書の有効性検証や有効性を阻害する社会的な諸要因を明らかにし、さらには、マルチメディア DAISY 技術を活用したインクルーシブ教育を目指す理想的な活用方法や学習環境や社会的環境、学校教育の在り方に関して包括的な課題整理を行ってきた。本研究の成果を踏まえ、さらにマルチメディア DAISY 図書の有効性を高め、インクルーシブ教育の充実とこれを基盤とした共生社会の創造に向けて、今後も力を尽くしていきたい。